

Todoroki collection
Chinese Ceramics



WATANABE & CO., LTD.

渡邊三方堂

ごあいさつ

皆様におかれましてはますますご清祥のこととお喜び申し上げます。
さて、このたび店舗移転に伴い、オープニングセレモニーとして
等々力孝志様が蒐集された「Todoroki collection」を開催いたします。
つきましては、ご多忙のこととは存じますが、是非ご高覧を賜りますよう、
謹んでお願い申し上げます。
まずは書中をもちまして、ご案内申し上げます。
平成 29 年 10 月

渡邊三方堂 渡邊祥午



店舗は6階に移転いたしました。



1. 青磁花形盃

官窯
南宋時代

Cup

Southern Sung Dynasty
Kuan celadon

LITERATURE
'MAYUYAMA, SEVENTY YEARS Vol.1', 1976, no.471.

D12.5cm

所載
『創業七十周年記念 龍泉集芳 第一集
MAYUYAMA, SEVENTY YEARS Vol.1』,
繭山龍泉堂(1976), no.471



471. 青磁花形盃 官窯 南宋時代
Cup
Southern Sung Dynasty
Kuan celadon D.12.5 cm.





2. 青磁杯

修内司官窯

南宋 12~13世紀

Celadon glazed cup

Guan Ware

Southern Song Dynasty 12th-13th century

D10.2cm H4.7cm



3. 青磁尊形瓶

官窯

南宋 12~13世紀

Celadon glazed vase

Guan Ware

Southern Song Dynasty 12th-13th century

LITERATURE

'MAYUYAMA, SEVENTY YEARS Vol.1', 1976, no.470.

H17.5cm

所載

『創業七十周年記念 龍泉集芳 第一集
MAYUYAMA, SEVENTY YEARS Vol.1』,
繭山龍泉堂(1976), no.470



470. 青磁尊形瓶 官窯 南宋時代
Vase
Southern Song Dynasty
Kuan celadon. H.17.5 cm.



4. 澱青釉杯

鈞窯

金 12~13世紀

Cup covered with bluish opaque glaze

Jun Ware

Jin Dynasty 12th-13th century

D10.4cm H4.2cm



5. 澱青釉盤

鈞窯

金~元 13~14世紀

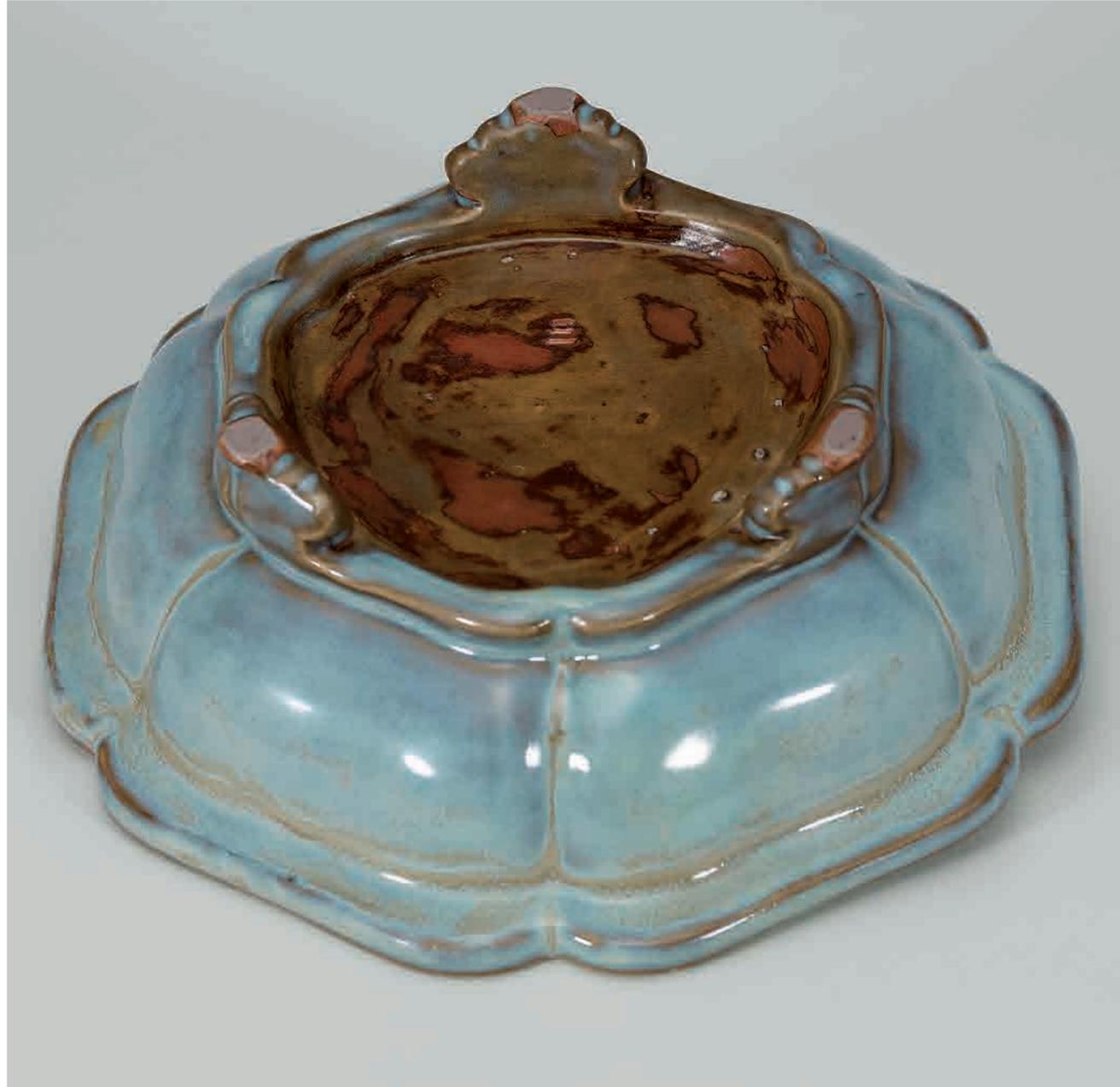
Foliated dish covered with bluish opaque glaze

Jun Ware

Jin-Yuan Dynasty 13th-14th century

D22.6cm H7.5cm No.3





6. 耀州窯柿釉輪花碗

金時代

Lobed Bowl Porcelain with Brown kaki glaze

11th-12th

D17.1cm H5.7cm



7. 宋青影牡丹飛鳥文鉢

南宋時代

Bowl with Design of Bird and Flowers Scroll

Qingbai Ware

11th-12th Century

D16.7cm H6.8cm



8. 宋青影陰刻水注

南宋時代

Ewer with Design of Flowers Scroll

Qingbai Ware

11th-12th Century

W17cm D17cm H16.5cm

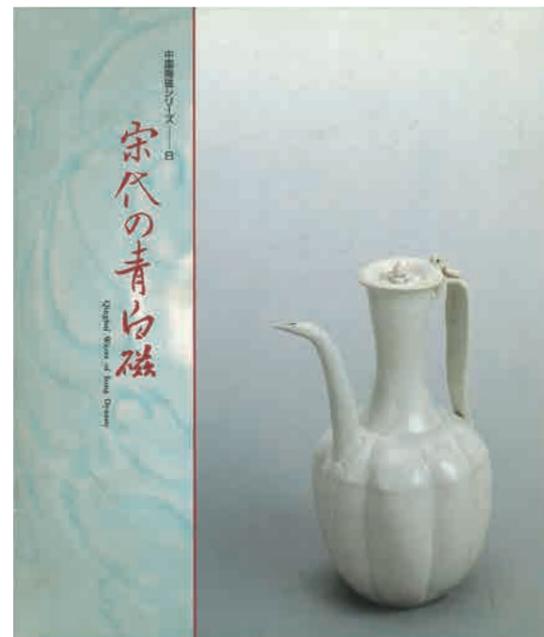
類品

大阪市立東洋陶磁美術館 企画展

中国陶磁シリーズ 8

宋代の青白磁

No.30 久保惣記念文化財団蔵



30 青白磁刻花 唐草文 水注
12-13世紀 h: 16.3cm 久保惣記念文化財団
EWER
Qingbai Ware with Carved Scroll Design/12th-13th Century
Kuboso Foundation



9. 磁州窯白磁鉄絵草蝶文鉢

金時代

Bowl with Design of Butterfly and leaves in Iron Oxide on white Ground

Cizhou Type Ware
12th-13th Century

D15.8cm H14cm

出版
世界陶磁全集 10 河出書房
fig116

世界陶磁全集 13 小学館
fig244

陶器全集 宋の磁州窯 平凡社
35



陶説 第770号より

等々力孝志さんの思い出 森 孝一

等々力孝志(とどろきたかし)さんが、二〇一六年(平成二十八年)十一月三日に亡くられました。享年七十七歳。

私が等々力さんの名前をいつ知ったのか定かではないが、古美術蒐集家として、随分以前から雑誌などで知っていたような気がする。一九九四年発行の『別冊太陽 骨董をたのしむ 1 徳利と盃』(平凡社刊)の記事中に掲載された、ロートレックのポスターから抜け出てきたような、マフラーを巻いて鶏籠山徳利を手にする等々力さんの姿が、いまも忘れられない。

一九九四年(平成六年一月)というのは、私が日本陶磁協会に入社した年であるから、等々力さんの名前を知ったのは、それ以前のことであろう。その頃、私は骨董の天才的目利きといわれた青山二郎の研究をしており、「青山二郎を知るには、時間の観念を捨てて、ジィちゃん(青山二郎の愛称)がしたように遊ばなければわからない」というので、和子夫人(青山二郎夫人)とジィちゃん行きつけのすし屋やバーなどを回って、ジィちゃんと直接交流のあった人たちから、ジィちゃんの話聞くという取材を続けていた。等々力さんと出会ったのも、やはりジィちゃん行きつけの「みよし」という名の東銀座にある博多水炊きの店であった。とは言っても、直接会った訳ではない。何度か「みよし」に通ううち、和子夫人が、昔、唐津のぐい呑みをジィちゃんが「みよし」の主人にあげたことを思い出したのである。すでに「みよし」の主人は亡くなっていたので、店を引き継がれた娘さんにそのことを尋ねると「常連だったトドロキという石油会社の社長さんにあげた」とのことだった。娘さんの話では「そのトドロキさんは、新潟の石油会社の社長とのことだったので、その時は、あの等々力さんのことだとは思わなかったのである。

等々力さんは長野県南安曇郡穂高町(現・安曇野市)の生まれで、等々力家は、室町時代初期の文書に出てくるような、安曇野を本拠とする名家であった。大町南高校から明治大学経済学部に進み、卒業後はエッソ石油に入社。高校時代の等々力さんは、詩人・高村光太郎とその妻・智恵子に傾倒し、二人の馴れ初めや『智恵子抄』の「樹下の二人」や「レモン哀歌」などを暗唱するほどの文学青年であったという。

エッソ石油では、東京支店のセールスマンを皮切りに、福岡・広島・沖縄・京都など各地で勤務し、支店長・部長として活躍されたというから、「みよし」の娘さんから聞いた「新潟の石油会社の社長」というのも、その勤務地の一つであったのかも知れない。その後、三井石油販売社長に就任され、三井石油退社後は、J A全農エネルギーの特別顧問として活躍された。

私が陶磁協会に入社した年、『別冊太陽』(一九九四年十月 平凡社刊)で「青山二郎の眼」の特集をすることになり、生前、ジィちゃんが通った湯田中まで取材に出掛けることになった。メンバーは青柳恵介さん・和子夫人・カメラマンの飯田安国さん・編集の片柳草生さんと私の五人だった。その帰り道「みよし」の常連客であったトドロキさんの話を何気なくすると、カメラマンの飯田さんが、「そのトドロキさんなら知っています」と言われた。早速、連絡を取ってもらい、ジィちゃん旧蔵の唐津のぐい呑みと、初めて対面することになった。それは、かなり金継ぎで修復された斑の酒盃で、等々力さんが愛蔵された酒器でもあった。それからしばらくして、和子夫人から「等々力さんという人が、ジィちゃんの持っていた井戸の徳利を持って訪ねて来られた」という連絡を受けた。それは、青山二郎が「愛蔵品目録」に描いた〈井戸の徳利〉で、その話を聞いた時、私は先述の『別冊太陽』に掲載された等々力さんの紹介文を思い出した。

骨董愛玩の醍醐味

「姿かたちが美しいだけでなく、語るに足る過去を背負って今ここにある……等々力さんが心を惹かれるのは、そんな酒器である。もちろんどんなに足繁く骨董店に通おうと、こんな酒器との出会いはめったにない。沖縄帰りの朝鮮唐津徳利との巡り会いは、そのまれな出来事である」

そのまれな出来事が、またもや起こったのである。等々力さんは、この〈井戸徳利〉と奈良の骨董屋で出会われたようである。好きな人のところへは、ものはちゃんと集まってくるのであろう。等々力さんが書かれた「古玩の余滴(二)」(『遊楽』連載)に、こんな話が載っている。

「十五年ほど前にならうか。京都のさる古玩店が店を閉ることになった。店主の若かりし頃はこの世界で相当活躍したらしいが、後継ぎがないため閉店を決意したのだという。『骨董の究極はこういう物だと、最後まで売らずに大切にしていました。あなたに渡します』と寂しげに笑って、この釘を手渡された。削りに削った骨董の芯のようなこの釘が、長年にわたる骨董屋人生の終幕を飾るに、この上なくふさわしい商品に思えた」

この〈天平二年銘の釘〉との出会いなどは、古美術蒐集家・等々力孝志の人柄を伝えている文章といってもいいだろう。

それから何年か経って、銀座に古美術店を構える杉山陶樹堂さんのところに用があって、夕方訪ねていると、偶然、等々力さんが店に入ってこられた。等々力さんとの初対面である。杉山さんに紹介されて初めて挨拶すると、「あんたが森さんか」と、ちょっとびっくりしたような表情をされた。ひよっとしたら、私のことをもっと年寄りだと思っていたのかも知れない。その時、等々力さんは京橋の古美術店に寄って、タクシーで銀座まで来られたようで、「財布を落としてしまった」と言っておられた(奥様の話では、等々力さんはよく財布をなくすらしい。ところが、決まって後から出てくるのだという)。そして私に向かって「これから俺とちょっと付き合ってくれ」と言って、杉山さんから幾らかお金を借りて半ば強引に赤坂の焼き肉屋に連れて行かれた。そこで何を話したかほとんど記憶にないが、いろいろと骨董談義をしたのだと思う。私のことは雑誌や人伝手ですでに知っておられたようで、等々力さんが当協会の会員になられたのはそれからすぐのことであった。

会員になられてからは、協会主催の勉強会や講演会、また、古美術店や展覧会のレセプションなどで、お会いすることが多くなった。

等々力さんは、いつも齒に衣着せぬ物言いで、ずばりと意見を言われた。特に唐津の酒器や李朝陶磁がお好きなようで、その他にも書画、古民芸、仏教美術、根来塗、琉球美術、文房具など幅広い。そのコレクションは東京国立博物館、京都国立博物館でも常設展示され、出光美術館、愛知県陶磁美術館、九州陶磁文化館、大倉集古館、ミホ・ミュージアムなどの特別展にも出品されている。

一九九五年(平成七年)には『古美術の四季―古器に生ける―』(河出書房新社刊)を出版され、古美術雑誌『小さな蕾』『目の眼』『遊楽』『別冊太陽』などにも執筆されているが、どういう訳か、『陶説』には執筆されたことがない。それでも、よく協会に電話を掛けてこられて「唐津支部に入りたいから、唐津に支部が出来たら教えてくれ。なんでも協力するから、唐津のために頑張ってくれ」と励まして下さった。等々力さんは、大の唐津ファンで、そのファンの一人が居なくなってしまったのは、なんとも寂しくてならない。

心からご冥福をお祈り申し上げます。合掌



等々力孝志氏

愛蔵の酒器を手に

写真提供:平凡社

陶説 第771号より

蒐集家・等々力さんの思い出 渡邊祥午

先月号に続いて、蒐集家・等々力孝志(とどろきたかし)さんの思い出を、私も綴ってみたいと思う。

誤解を恐れずに言えば、コレクションは「その人が持っている三点だけを観れば、その人に会わずとも、その人となりとコレクションのレベルがわかる」と言われる。

等々力さんは酒器や仏教美術、根来など幅広く蒐集されたが、しっかりした中国美術や韓国美術の鑑賞ものも蒐められていた。

中国美術は、蘭山龍泉堂の大番頭の杉山陶樹堂から南宋官窯を、またご親友の工藤吉郎医学博士から鈞窯(きんよう)や磁州窯(じしゅうよう)の作品をお分けいただいたそうだ。

余談だが、その鈞窯の盃に見惚れて、陶芸家の川瀬忍さんは今年、展覧会「机辺 掌中」で鈞窯盃写しを作陶されたと、こっそり言われた。

韓国美術は、ほとんど古美術平本さんを頼られた。近年めつきり韓国の焼き物を集中的にコレクションされる方を見かけなくなったが、等々力さんはご自身のコレクションで、二〇一四年愛知県陶磁美術館「高麗・李朝の工芸」の展覧会の大部分を担当されるほど、近年のコレクターとして稀有な方だった。

そのラインナップは、まず『陶説』(二〇一四年八月号)の表紙を飾った「李朝秋草文瓜形壺」(写真)。長年所在不明だった知る人ぞ知る作品である。愛知県陶磁美術館の「日本 中国 韓国一陶磁の名品、ここに集う―」(二〇一三年)に出品された高さ四十二センチある「李朝白磁大壺」。これは韓国では月の壺(壺を回しながら観ると刻々と表情が違って見える)とも言われている白磁の王様である。そして「高麗黒釉白花梅瓶」。これもめったにお目にかかれないう伊藤博文旧蔵の佳品など、韓国の焼き物好きを自認するなら、こんな品を持ちたいと誰もが恋い焦がれる作品ばかり。大阪市立東洋陶磁美術館の安宅コレクションと一緒に飾っても遜色ない三点をお持ちだった。

等々力さんは自著『古美術の四季―古器に生ける』(一九九五年 河出書房新社刊)の「序にかえて」でこう述べておられる。

骨董の蒐集を始めて、かれこれ二十年。われながら、よくぞつづいたものだ。なにしろこの道業には、ついにやり遂げたという到達点がない。どこまでやっても道半ば、果てしがないのである。ようやく念願のものを入手しても、またしても欲しいものがあらわれる。はじめは他愛もないものを集めて喜んでいたが、次第に滅多にない名品、珍品のたぐいが欲しくなる。眼前にあらわれずとも、つねに胸中には恋い焦がれてやむことのない幻の名品が去来している。その空想裡の名品を追い求めて、つねに情報の網を広げ、競合するコレクターの動向に気を配り、骨董商とのつき合いを欠かさぬ。こうして耳をそばだて、目を血走らせても、これぞという品との出会いは年に一、二度あればよしとしなければならぬ。また運よく出合えても、それらは例外なしに法外な値である。やりくりの範囲を超えた算段を重ねても、必ず入手できるともかぎらぬ。(中略)さて骨董というと、老人が金と暇にあかせた道楽というイメージが強いようだ。だが、この世界は若くなければ、とでもつき合ってゆけぬ。若さとは、たんに年齢をいっているのではない。心身ともに充実せずして、だれが古美術に対しての素直な感動を覚えようか。

次に財力だが、金がなければ、たしかに美術品は買えぬ。巷間、骨董蒐集は、ひとたびのめりこんだら「道楽」を通りこして、生涯完治せぬ「病氣」だそうだが、まことに「修羅の道」である。是が非でも欲しい品を目前にして断念せざるを得ないなど、酔狂の道に踏みこんだ身の悲哀をつくづくと嘆くことになる。

だがよくしたもので、ちょっと視点を変えれば、だれもがまだ気づいておらず、安くても美的価値の高い品が、まま骨董店の片隅に埋(うづ)もれていることを、幾度かの無念の涙を流して後(のち)、ようやく知ることとなった。つまるところ、名品をものにするとは、本人の眼の高さと情熱次第ではあるまいか。

まさに金言至極である。

等々力さんの四十八年の骨董人生において、私自身はコレクション蒐集のお手伝いは一度もなく、むしろ等々力さんの骨董人生の終活をお手伝いさせていた

だいた。

ある時、等々力さんは「なべさんよ、貴方も火宅の人だね」と文学的表現で私の人生の紆余曲折を笑いながら揶揄された。

検索すると以下の様に出てくる。――『火宅(かたく)の人』は、壇一雄の小説。「新潮」誌上で昭和三十年(一九五五)より二十年にわたり断続的に連載。流浪の作家と彼をとりまく女性たちを描いた作品――。

本来「火宅」とは、仏教説話(正確には「法華経 譬喻品(ひゆほん)」)の用語であるが、それは等々力さん自身が、例えるなら、燃え盛る家の中で危険迫る状態にありながら、全く気づかずに楽しみに興じていて、そこには、骨董に執着し、享楽に耽る衆生として生きる心の模様を、正に我が身の様「火宅」だと揶揄されていたのではないだろうか。

それは今想うと等々力さんご自身の骨董人生を笑い飛ばされていたのかも知れないと、等々力さん宅を訪れ、徳利を持って語りかける遺影に合掌する度に、その粋な言葉が脳裏から離れない。晩年の最後に神山繁氏より手に入れた瀬津伊之助旧蔵「志野輪花盃」は、火宅の人に等々力さんご自身を重ね合わせた末に、たどり着いた境地なのかも知れないと思う。

(渡邊三方堂)

	「青花秋草文瓜形壺」 朝鮮時代 18世紀 高13.5cm
--	---------------------------------------

1879年(明治12)	6月9日、初代渡邊久生まれる。
1924年(大正13)	久、同郷の縁で野村徳七の知遇 画骨董業を創業。福井市片町10に三方堂を開設。
1926年(大正15)	東京市四ッ谷伝馬町3にて営業。
1926年(昭和元)	東京市芝区明舟町8(東京都港区西久保巴町12)に移転。
1929年(昭和4)	3月、久、ドイツ系アメリカ人の中国美術コレクションの売立てを「スツラヘルネク氏所蔵品展観」(東京美術倶楽部)として、川部商会、小川多之介とともに開催。
1947年(昭和22)	有限会社三方堂とし、代表社員渡邊喜八郎、社員渡邊喜七郎で営業する。
1970年(昭和45)	喜七郎、安宅産業株式会社社業務開発本部美術品担当(嘱託)となる。
1983年(昭和58)	喜七郎、韓国三星湖巖美術館の開館に尽力。

発行＝渡邊三方堂・渡邊祥午 <p>〒104-0061 東京都中央区銀座2-4-1 銀座ビル6階</p> 携帯電話 (090)8770-4352	
電 話 (03)3567-8382	
メールアドレス watanabesanpodo@gmail.com	撮影＝渡邊 修
ホームページ http://www.watanabe-sanpodo.jp/	印刷＝株式会社光和印刷

